文献紹介

彦根市史編集委員会編：

『彦根　明治の古地図』1～3

（彦根市．第1分冊　2001年3月　170頁，第2分冊　2002年3月　167頁，第3分冊　2003年3月　193頁．各冊とも　A4判　本体2,000円。）

本書は，平成13年から刊行が開始された『新修彦根市史』全13巻の別冊として，毎年1冊ずつ3分冊の形で刊行された，解説付のカラー古地図集である。

本書の構成・内容や如何に，と評者（のみならず地方史誌に関心を抱く多くの歴史地理研究者）が注目する理由は二つある。一つは，昭和35～39年に中村直勝・江頭恒治両氏の監修の下に上・中・下の3巻構成で刊行された『彦根市史』(以下，旧版と略称する）との比較という点である。この旧版は後に復刻版が刊行されたこと（昭和62年，臨川書店発行）からも窺えるように，内容の充実した地方史の一つとして知られ，編集委員の矢守一彦・西川幸治の両氏はそれぞれの主著(『都市プランの研究』及び『幕藩社会の地域構造』，『日本都市史研究』)の中にこの市史編纂と深く関わる研究成果を収録しておられる。今回の『新修彦根市史』(以下，新版と略称する）では，世評高い『堺市史　続編』全6巻の編集・執筆にあたられた朝尾直弘氏（主著『近世封建社会の基礎構造』にはこの市史編纂と深く関わる研究の成果が盛られている）を編集委員長に，旧版でも活躍の西川氏を同副委員長とし，新旧2種の堺市史の場合と同様に，京都大学文学部日本史学教室のスタッフないしその前身の国史学教室の卒業生が編集委員の過半を占めておられることから，旧版に比して，いやそれ以上に最近刊行の同じ滋賀県内の他の市史(例えば『新修大津市史』全10巻，『草津市史』全7巻，『八日市市史』全6巻）に比較して，どのような新機軸が採り入れられるのか，大いに興味をそそられる。

もう一つの注目は，近年の地方史誌編集にあたって重視されている地図資料がこの新版でどう取り扱われるか，という点である。編集委員の金田章裕氏は，その趨勢を強く進めた『宇治市史』全7冊や『福井県史』全25冊で執筆・編集に大きく携わられた経験者であり[1]，彦根市域は歴史地理学研究の中で重要な対象をなす条里・古道・城下町・宿場町を抱えていて，極めて魅力ある地域と言える。

以上，前置きがいささか長くなったが，新版での地図資料の位置づけと内容の両面で注目される中で，本書は敢えて市史の巻構成と別建てで3分冊で刊行された訳である。

まず全体の構成を記せば，本書が対象とする明治初期作製の古地図に関する全国的視野に立った概説が，編集委員の金田氏によって第1分冊の巻頭部に記され，さらに第3分冊の末尾にも同氏による本書収録古地図278点に関する概説が「耕地絵図」「地引絵図―地券取調総絵図」「地籍地図」「番号絵図・土地台帳付属地図」に分けて述べられている。これら2種の概説にはさまれて，本書の主体をなす古地図のカラー写真とそれに関わる解説が，明治中期の町村制施行直後の町村ごとに，旧村（大字）ないし城下の町単位に配列されており，金田氏のほかに，同じく歴史地理研究者たる南出眞助・佐野静代の2氏を加えて計3氏により，明治初期の旧村・町単位に分担執筆されている。第1分冊には市域南部の葉枝見(36頁)・稲枝(50頁)・稲(34頁)・安水(30頁）の4村が収められ，第2分冊には市域中部の川瀬(43頁)・日夏(15頁)・磯田(21頁)・南青柳(9頁)・福満(27頁)・高宮(9頁)・千本(22頁)の7村が，第3分冊には市域北部の鳥居本(68頁)・青波(28頁)・北青柳(13頁）の3村および彦根町(59頁）が収められている。

次に，かかる構成の下にどのような古地図が収録され，どのような解説がなされているか，について紹介する。

第1の特徴としては，本書の収録対象たる古地図を明治初期に作製されたものに限定していることが挙げられる。しかも原則として，各地区の冒頭に明治6年ないし同7年作製の地券取調総絵図(壬申地券地引絵図)を取り上げ，それが現存しない場合でも明治4年作製の耕地絵図を掲げている。参考図にも，明治初期ないし明治中期までの

地籍地図ないし地租改正地引絵図や土地台帳付属絵図が掲げられ，近世絵図は宿場町と城下町の場合に限定されている。

各地区ごとの解説文も，それら古地図の理解に資するためという姿勢に貫かれていることが第2の特徴といえる。明治13年の『滋賀県物産誌』からの引用も，小字図が冒頭の古地図に続いて付されているのも，古地図から読み取れる地域の特徴を記すことに徹した執筆方針の表れといえる。

では，このような特徴をもつ本書が具体的にどのような内容をもつのか，各分冊から1～2町村ずつ選んで紹介してみよう。

第1分冊の巻頭に位置する旧神崎郡葉枝見村（南出氏執筆）は，条里地割が広く残る土地だけに，地区冒頭に掲げられた地券取調総絵図（地券地引絵図）には黄土色に着色された田が目立ち，1町間隔で直交する朱色の道や青色の水路，それらによって区切られた1町方格内部の番地を付された地筆が半折型ないし長地型をなしている様子が明瞭に看取できる。桃色の屋敷地や緑色の畑地も，主として河川沿いや琵琶湖岸にかなり認められる。この色鮮やかな古地図に続いて，1/2,500国土基本図の上に緑色で明治初期の区界・旧村（大字）界・小字界と小字名などを記入した小字図が，1/7,500の縮尺で示されている。解説文は，明治初期の村（大字）の簡単な概要に続いて，古地図から読み取れる当時の土地利用を『滋賀県物産誌』の記述と比較しながら述べ，地形条件や条里についても言及している。集落立地や開発事情についても，既往の研究成果や史資料とも関係づけて記している。参考図としては，冒頭の古地図の異本や明治中期の大字全図のカラー写真が掲げられている。

第2分冊の扱う旧犬上郡の場合，地券取調総絵図の代用として彦根藩命で作製された耕地絵図が冒頭に掲げられており，地筆の地番・面積のほかに地目別の等級も併記されている点がこの耕地地図の特徴の一つといえる。郡内の磯田村（佐野氏執筆）のなかで，三津屋・須越の2大字は琵琶湖岸北東部に点在する内湖を域内に抱えている点で特異である。すなわち冒頭の耕地地図でも，紺色で描かれた内湖の周囲に黄土色の田が島状に浮かび，琵琶湖岸の砂質の微高地に桃色で示された屋敷群（集落）と空色の畑が帯状にのびる様子が印象的である。特に三津屋の場合，曽根沼は八世紀の東大寺領覇流庄の地として正倉院文書にも関係の絵図が収録されているため，本書の解説文でも古代以来の景観変遷について言及がなされており，享保年間の古地図のカラー写真も大きなスペースを取って掲げられている。なお三津屋の場合，本来冒頭を飾るべき地引絵図も解説文末尾に配されている。

第3分冊では，中山道の宿場町を核に山間部を広く含む旧坂田郡鳥居本村と，近世日本の代表的城下町たる同郡彦根町とが，前述の第1分冊や第2分冊では見られない特徴を示している。まず宿場町鳥居本（南出氏執筆）の項では，宿場町として実質的に一体をなしていた4村の明治7年合併後の状況を示す地券取調総絵図が冒頭に置かれている。朱色に着色された宿場町を赤色で示された中山道が貫通し，その周囲には田（茶色）や畑（鶯色）がひろがり，背後には多様な濃淡で起伏を表わす山林（凡例には「木山」と表記）が描かれている。それに続く3頁分を占める小字図と対照すると，通例に漏れず，山林の面積が宅地・田畑に比して過少に描かれていることが理解できる。別図として掲載されている明治4年の耕地絵図（合併前4村が別個に描かれている）及び明治16年の地位等級縮図の山林描写に注目すると，地券取調総絵図の場合に比べて前者は面積が一層過少に表わされているのに対して，後者は実測図であるために図全体に占める山林部分の比率が高い。さらに天保2年(1831)の絵図が参考図として分割収載されており，宿場の当時の状況がよくわかる。なお，鳥居本の隣の宿場町たる旧犬上郡高宮村の場合（南出氏執筆）も，文化元年(1804)の絵図が付載されている。

旧犬上郡彦根町（金田氏執筆）の場合，彦根各町の地券取調総絵図（明治7年）の索引図というべき「犬上郡彦根町区分図」のほかに，天保7年の「御城下惣絵図」及び大正2年の「彦根市街図」が冒頭に掲げられ，19世紀における城下町の変化の概要がまず解説されている。ついで，第一区から第十区の区単位にそれに含まれる城下各町の地券取調総絵図（一部は後年作製の地籍地図など）と小字図が収められており，宅地など土地利用のカラー表示が区ごとに微妙に異なるものの，明治初期頃の彦根城下町の町割・宅地割の状況が詳し

くわかるようになっている。

改めて申すまでもないことだが，古地図集と銘打つ本書の核心は古地図のカラー写真にあり，それを本誌ではお示しできないため，その充実した内容と編集・執筆者の苦心の跡を十分に紹介できないのは，誠に残念かつもどかしい。とは言え，前記の矢守氏をはじめ，幾多の著名な歴史地理研究者の研究対象となった彦根市について，担当編集委員金田氏の思い切った発想によって明治初期作製の古地図類に収録対象を限定した本書は，A4判全頁アート紙カラー印刷の紙面に，執筆者3氏の深い専門的知識と工夫によって，専門研究者以外にも理解しうるように，平易かつ簡明な解説がなされている。明治初期の古地図類を利用した歴史地理研究者用のみならず，そのような研究法を学生・院生に指導する際の基本資料として大いに有用であるばかりでなく，湖東の歴史地理に興味のある方々にも，さらには地域住民の方々に「地図に書き残されてきた地理・歴史情報を……学習することによって郷土への理解」を深めてもらう（本書各分冊巻頭の「本書を読むにあたって」末尾に記されている本書の意図）のにも大いに役立つものと信じる。

最後に，本書が新たな彦根市史編集の一環として企画・刊行されたということから，旧版に収録されていた城下町関係の古地図類をはじめ，本書に収められなかった古地図，あるいは研究成果を集約した復原図など，この新版の各巻のどこかに収録するか，あるいは『福井県史』のような大判の別冊図版集として是非刊行していただくよう希望したい。また他方で，古地図・絵図・歴史地図・(旧)空中写真といった歴史地理学ないし地図学に深く関わる広義の地図類が，近時刊行されている地方史誌においてどのように取り扱われているのかについて，その重要性を喚起する方向で調査する必要があるのではないかと感じた次第である。

（戸祭由美夫）

注

1) これら2種の地方史の地理関係の編集・内容の斬新さについて，評者はかつて書評欄で紹介した。特に，『宇治市史』では，「生活と環境」との副題をもつ第5巻・第6巻で藩政村単位に明治中期の地籍図と空中写真を付して地域の解説がなされている点で，『福井県史』では，「絵図・地図」と題する第16巻が上下2冊のB4判箱入り図集で，しかも多数のカラー一枚図を収める上巻と条里復原図と解説からなる下巻という対照的な構成をとっている点で，今なお独創的な内容をもつ。

林屋辰三郎・藤岡謙二郎共編『宇治市史　第5巻—宇治川東部の生活と環境—』.「地理学評論」53巻10号，1980年，674-676頁。
『福井県史　資料篇16上巻［絵図・地図］』.「地理科学」45巻3号，1990年，66-67頁。
『福井県史　資料篇16下巻［絵図・地図］』.「地理科学」47巻4号，1992年，53-54頁。